



図1: 成熟♂. 浜松市南区、2016.10.26
撮影: 福井順治



図2: 遠州浜海岸 浜松市松島町、2017.10.30
撮影: 福井順治



図3: 成熟♀. 静岡市清水区、2017.10.9
撮影: 横山謙二



図4: 未熟♂. 静岡市葵区、2017.5.14
撮影: 伴野正志



図5: 交尾. 浜松市南区、2017.11.2
撮影: 福井順治

スナアカネ *Sympetrum fonscolombii* (Selys, 1840) の進撃が続いています。アジア～ヨーロッパ、北アフリカなどに広く分布するトンボですが、我が国には定着していないアカトンボの一種（図1）とされ、国内には台風や偏西風に乗って飛来する、いわゆる「飛来種」と考えられてきました。そのトンボが、今年（2017年）はこれまでになく大量に飛来したようで、静岡県では過去最多の個体数が観察されました。

静岡県での初記録は1989年の秋、加藤哲男さんが周智郡春野町（現浜松市天竜区）で採集した1♂で、当時は国内2例目として極めて稀な種として扱われていました。1990年代になると、浜松市南区遠州浜海岸（図2）において数例の記録が出始めて、2000年代には全国的にも記録例が増えてきました。2004年の秋には、遠州浜海岸において12日間に総計50頭を超える個体が採集され、その後もほぼ毎年見られる種になっていました。そして、今年は10月の遠州浜海岸では1日だけでも40～50頭が確認されて、アカトンボ類では最も個体数が多い種になった日もあり、同じ時期には静岡市でも見つかりました（図3）。しかし、今年の10月は天気が悪い日が多かったので、十分な調査ができませんでした。

今年の場合は、9月中旬の台風によって国外から飛来した可能性が高いと思っていますが、国内あるいは県内で幼虫が生育して羽化した個体であることも全く否定はできません。すでに通例では記録されない5月に、伴野正志さんは静岡市葵区の麻機遊水地にて未熟な個体（図4）を記録しています。これは県内で幼虫が育った個体のように思えます。遠州浜海岸では交尾（図5）や産卵も観察されているので、水位が保たれるなど、幼虫が越冬できる条件が整えば定着する可能性も大いにあります。

スナアカネは様々な点で特異なアカトンボです。まず、一風変わったその名前は、体色が赤茶色の砂地に似ることからの命名とされていますが、国内にはそんな色の砂地は少ないので、単純に砂地に好んで静止することに由来するような気がします。形態も独特で、複眼の下部や♂の胸部は化粧したような青みを帯び、脚は内側と外側をそれぞれ黒と黄色に色分けしているなど、どこか異国情緒を感じさせる風貌をしています。生態的にも変わったところがあり、飛翔する時は水面でも地面でもかなり低空を飛び、静止する時も砂地や低めの草茎のことが多く、上空を旋回したり高い木の枝先に止まるようなことはまずありません。そして、多くのアカトンボ類は卵越冬のため、秋に産まれた卵は翌春まで半年ほど休眠しますが、スナアカネの場合は卵期が非常に短くて10日ほどで孵化してしまいます。

アカトンボの多くの種が減少していく中で、スナアカネが今後も定着して増加を続けられるのかどうか注目したいと思っています。